

斷片

一 保 姆

生れて二百日位たつた、健康な裸體の赤ちゃん、手足をピンピン動かして湯あげの上に轉がつてゐる赤ちゃん。聖畫でなくとも其周圍には光が射してゐる、赤ちゃんを正視する人々の瞳にはその輝がてりはえる。生命、發育といふ偉大な運動に突き進んでゐる生命、生命さながらの姿、健康な裸の赤ちゃん。

それは私達の小さい友達の、つひ先頃の姿である。

私達は現在、着物を着、靴下をはき又靴をはいてゐる小さい友達をみる、けれど元氣な彼等はやがて上着や靴や靴下がうるさくなつて來る、いつ

か室の椅子に之等をぬいで輕々と戸外に出て來てよく走りよく跳ぶ。裸で走る様子のなんと氣持よさうな事！ かゞやく頬、のびた腕、スポーツの秋がこゝにも漲つてゐる。

私達は、かう言てゐる間も育ち行く小さい友達の身體を布や紐で縛つたりくゝつたり土の人形と同じに塗たり包んだりしないようにお母様達と話し合ひをしなければならぬ、そんな話しあひは、とくにすんでしまつたところもある、まだすまなところもある。

椽の下の瓦け鉢の中に、土だらけの茶色の皮や肉厚な幾重もにかこまれた球根から、淡綠色の芽

が一二分頭を出したのを見た時、私達はヒヤシンスの色も姿も花も香もすべてを含んだ小さい芽の生命を、輝くばかりの生命の光を感じる。

やがて柔かい土の床に移された、若い生命は日光と水とに育まれ健やかにのびて行く。自然は、しめつける紐やからみつく布片で若い生命の育つのをさまたげない。

大地の母の宏い、そして細い心づかひは若い生命をグングンのばし育てゝ行く。

健康な裸體の赤ちやんのお母さんは根の芽より、もつと複雑な、もつと力ある、もつと深い赤ちやんの生命を、どんなに伸ばし育てゝゐるか。

× × ×

近代の舞踊革命家と云はれるイサドラ、ダンカンは彼女の舞踊を波や雲、風、空とぶ鳥、野を去る兎等自然の運動から學んだと云はれて居る、そして「ギリシヤ人は自然の法則の研究者であつたか

ら偉大な藝術を生んだのである」といふ。彼女自らその弟子を導くのに、少しも自らの舞踊を模倣させる事なく、各自の自由な運動を學び、弟子自身の踊を發見するように助けて行たとの事である。

昔のお師匠さんは、我が藝を我が生命と共に、弟子にうちこんだ、そこには生命の尊さがある。お師匠さんは生命がけて生み出し、生命がけてつたへてゐる。

夜店で買った紙人形の着物を翌朝持て行て、幼稚園の小さい友達に着せようとする、コレラ菌のような怖ろしい存在はないかしら。

私達の前にゐる多くの小さい友達、彼等の昨日の姿は「裸の赤ちやん」である、その肉體も、心も、健かに、強く美しく、のびるように育てるのが私達ではないか。私達は、彼等として育てなければならぬ、自分のまがつたり、ねぢれたりした着物又は借りて來た着物などを無理に着せて、

彼等の美しい腕を折たり、挫折したりしてはならぬ。

あの美しい植物の芽、球根の若芽を金槌で、打ちつぶす者があつたら、それは正常の人ではないと思はれよう。

私達は、私達の小さい友達に對して——勿體ないほど信頼されてゐる——正常の人でないような事を爲はせぬか。

一步あるくにも、踊りはねる元氣な足を、をさえて細く弱くしてはゐないか、野生の動物をせまい檻の中に久しく入れて置くと、野に生きてゐた時の猛々しさ、自然と調和する運動を失て、せまい檻の中で出來得る運動をするようになる」と云つたダンカンの言葉はくりかへし讀んでゐると怖ろしくなる。

明日の日本を双肩に擔て立つべき、私達の小さい友達、彼等の足が、「せまい檻の中」に止められ

るような事があつたら、そして其の中で出來得る運動をするようになったら、私達は其のあとを考へるさへ、怖ろしい。

肥えた土に豊かな收穫があり、よき礎の上に堅固な家が建てられる事は、あまり知れきつた事で忘れてゐるのではあるまいか。

幼稚園は種を蒔くところである、現在花をさかせ實のらせるのではないが、美事な花や實を遠い將來に望みつゝ種を蒔くところである、といふことを聞いた、そして長い間さう思て來た、けれど近頃私は、幼稚園はそのも一步前のように思ふ、よき種を蒔かれた時、成長し得るような、よき畑を耕すのが私達幼稚園での仕事のように思へる、宏大な建築の基礎工事をするのが私達幼稚園の仕事ではないか、どんなよい種もふみ固められた土では育つことが出來ない。心してよく耕された畑にはよい芽が出る。復興の市街には長い時日と多

くの人を要する基礎工事を數多く見る。

小學校、それ以上に於てよき種をまかれた時、育ち得るような、よき耕地を作る事は最も根本の要事ではあるまいか、畑を柔く豊沃にする事、或は固くすることいづれもお母様達と私達の双肩にある。そして己に芽生えを發見した時私達は心して心して、芽の伸びんとする方向へよき成長を助けねばならぬ、それは或る形にはめるように針金でため、楔で曲げるのでない。其の芽の伸びんとする傾向を細心に觀察して、其後にそれを助けるのである。

新花道の小林先生が「生けようとする草なり樹なりが野にある時、山にある時如何なる状態にあつたか、雑木林峯の孤松、叢り咲く秋の草花、谷間の一本百合、岩にはふそなれ、いづれもそれぞれの特長がある、まづそのそれの形を知り進では地下の發生春夏秋冬に變り行く發育状態をも

究はめて、其の植物の特長を失はずに生ける事」以て生花の第二の原則と云はれる事は私達の大いに耳を傾けなくてはならない事と思ふ。

私の幼稚園は小學校の附屬であるが、かつて本校の音樂の先生が、「どうか幼稚園の子供達には、小學唱歌は使はないで下さい」と申された、小學唱歌は小學校で蒔くべき種であつた、私達は其種を發芽成長させ得るよき畑を耕すはづであつた、その音樂の先生はまたかういふ事を云はれた「知らないのを新しく教へる事はよいが、間違て覺えてゐるのをなほす程困難な事はない、なほされる者もなほす者も辛い、そこには非常に苦しい努力が要る」私はこの言葉を思ひ出して、荒地にぼう／＼とはえる荒地野ぎくの事を思ふ、取ても／＼生える始末のわるい雜草である、野にある雜草はよい、けれど畑にはよき土が盛り上てゐなければならぬ。

柔い土の床、野菜畑の中に、まる／＼と肥た裸の赤ちやんがニコ／＼して轉つてゐる繪を、どこかで見た事がある、其の邊が明るい光で輝いて小鳥の歌が音楽のように聞える。私は私の小さい友達のを、ここにこうして離れて机の上で考へると、輝かしいあの繪が、現のようにまぼろしのよ

うに口のあたりに生きて来る。この壯健な赤ちやんをギリシヤのアポロの様にヴィナスのように強く美しく伸ばし育てるようになるのは、そして次代の日本を世界に輝すようにするのはお母様方！

あなたと私達です。

——(昭和三年十月)——

東京女子高等師範學校の秋季大運動會

——明治神宮外苑競技場に於て——

十月二十二日の朝、氣づかはれた前日、來の雨がからりとをさまつて、青天高く、一點の雲も見られぬ快晴、嬉しくも恵まれた天候に先づ意氣はあがる。

八時三十分、運動會開始された。

本校、附屬高女、附屬小學、附屬幼稚園の各部で、何れも運動慾を満足させ度いといふのである。フィールドで競技、或は體操がはじまると見るや、外のトラツクでは五十米、百米、或は四百米と、走騷して居る。廣い競技場が、すき間も絶え間もなく使はれて行く。

やがて九時三十分、幼稚園の「旗拾ひ競争」見るよりも自ら運動して見たの運動會である幼児達の番は來た。スタンド前のトラツクを五十米、決勝線のま近に

置いてある旗を口指して一生懸命驅けて來る。旗を手にして、ラストヘビーをかけ、最後の勝利を争ふのは大きい組、旗を手にするとそこから、嬉しうに横側に立つてゐられる先生に飛び付き來る。どのけ、旗を一本づゝ拾ひ得てよる。次いで、旗を一本づゝ拾ひ得てよる。んだ幼児は嬉々と打ち振りつゝ、「旗行列」にと廣き芝生の中央に出場、かけく、水兵の遊戯をして、桃太郎をうたひながら三ツ巴を畫いて行進する可愛いらしさ。

暫くの後、又も出で、有らん限りの力をこめた紅白綱の引合、これは最後にして午前十一時半幼児は解散、父兄の手に渡された。

正午すぎ、開院宮春仁王殿下妃直子殿下、北白川宮美年子女王殿下、北白川宮下、北白川宮下、李王殿下、妃方子女王殿下、李德惠姫稟臨遊ばされ、一同の意氣はいやました、この頃、當日の見もの、呼び物は續いて、いよ／＼高調せううちにプロケラムは最後に近づき、本校、高女、小學校、帶を召された本校の先生方まで打ち交はされた「ゴザツケダンス」となる。夕陽はせまつた。感激に引き入れるやうな樂の音に合せて大集團は動く。しばし、場内聲もなく集團の威力が、莊重な氣に打たれる。

斯くで感激のさ中に會は閉じられたのであつた。この日各殿下の終まで御覽あらせられたことは、更に更にあつき感激であつた。

(きく子)